松原宏之著『虫喰う近代 ――一九一〇年代社会衛生運動とアメリカの政治文化』

（ナカニシヤ出版、2013 年）

兼　子　　歩

20世紀転換期のアメリカは工業化・都市化・移民の急増による大きな社会的変容を経験し、その混乱状態への対処として、いわゆる革新主義時代と呼ばれる改革運動の波を迎えることになる。そうした改革運動のひとつが、売買春が性病の蔓延という社会問題を生み出しているとしてその根絶を目指す改革運動であった。本書は、1910年代に高揚した売買春廃絶運動の盛衰を通じて、社会の大きな変容に直面した20世紀初頭のアメリカにおいて、いかなるアクターがいかなる新しい政治文化を構築しようと試みたのか、そしてその苦闘の末に実際に登場した新たな政治文化とはいかなるものであったのかを明らかにしようとする試みである。

本書は、序章・終章および6つの章から構成されている。序章は、本書の問題設定を明らかにしている。

著者によれば、革新主義期の改革運動の歴史的研究は近代化論的な仮定の影響を色濃く受けた結論ありきの叙述に陥ってきたという。専門家エリートが新しい統治の知たる科学的手法を導入することによって混乱した秩序の回復と移民・労働者階級の統制・封じ込めが成功する、というシナリオである。1970年代以降の「新しい社会史」を代表する女性史研究による売買春史研究の成果も、この枠組みを前提として、中産階級が性政治的な観点から下層民を規律・統御する新しい秩序構築の機制としての売買春問題という議論を生み出した。結果として「被抑圧者の経験と声を救い出していく作業」によって「かれらを抑え込む制度の存在をしばしば裏書きする」(22) ことになったのだと。

しかし著者によれば、このような単線的な枠組みによっては、なぜ1910年代に多様な改革者たちが売買春という社会問題に注目したのか、そしてなぜこの問題をめぐって激しく論争が闘われたのかという点を描きえない。「論争の行方があらかじめ決まっているとは思えなかったからこそ、社会の進路を賭けて人びとは盛んに綱引きを繰り広げたのではなかったか」(8)。この論争の行方の「不確定さ」にこそ注目すべきなのだと、著者は強調している。

ここにおいて著者は、政治文化史を導入する必要性を説く。著者は政治文化史という概念を「権威や規範や社会関係のある特定のありようを、つくりだし承認し日々確認していく」機制や状態の研究 (11) であると定義し、かつ新しい政治文化の確立による秩序回復というゴールをあらかじめ設定することなく、歴史的状況の固有性に注目して諸アクターの競合の分析をすべきである。ゆえに以下の2点から反売春運動史を批判的に再検討すべきと、著者は述べる。第1に、単なる秩序再建の道具ではなく旧体制たる古典的な共和主義・自由主義の機能不全に対する異議申し立ての科学という側面と、そのせめぎ合いゆえの不安

定さに目を向けることの重要性である。そして第2に、科学の名のもとに参集した改革者たちの多様性と競合に注目する必要である。著者によれば、科学の意味は一様ではない。男性を中心とした専門家集団である衛生医や社会科学者に対して、主に女性によって担われたソーシャルワーカーもまた科学を主張した。その競合において、医学や社会科学はあらかじめ科学的権威を独占する地位を確保したわけではない。この2つの視点を反売買春運動の分析に導入し、当時のアメリカ政治文化がいかなる再編を遂げたのか（あるいは遂げなかったのか）を明らかにすることが、著者の狙いである。

本論は6つの章からなる。第1章では、1910年代前半に全米各都市で導入された売買春問題委員会による新しい秩序形成の試みとその挫折を論じている。著者によれば、従来の解釈は白人奴隷制論の流行から売買春問題委員会の設置による調査・報告に至る展開を、一貫して下層民規律化の動きとしてきた。これに対し、「事実」の積み上げによる「科学」的手法を強調する委員会方式は、改革者たちにとって旧政治秩序に挑戦し「都市政治の新しいアクターとして名乗りを上げる行為」(44) であったという。しかし同時に、こうした委員会は、実業家や医学者・社会科学者、そしてソーシャルワーカーたちが売買春という社会問題への解決策をいかに示すべきかをめぐって緊張を孕んだ折衝を行う場となった。科学の名のもとに結集しつつ、科学性を誰が代表しうるかをめぐる競合が同時に行われたのだと、著者は論じる。

次に著者は、新しい政治文化としての科学の地位確立と権威獲得をめぐり連携しながらも競合した2大アクターである性衛生学者（第2章）とソーシャルワーカー（第3章）に、それぞれ焦点を当てる。当時を代表する性衛生学者プリンス・モローらは性病を社会問題化し、道徳的・宗教的議論ではない「科学的な」売買春廃絶運動を企図した。しかし旧政治秩序側、すなわち管理売春志向の都市当局や守旧的な医師たちの抵抗に遭う。モローらが志向する科学的な売買春問題への取り組みには、ソーシャルワーカーたちの協力を得ることが不可欠であった。ゆえにモローは、性衛生学の「男性化を通して専門性を確保」(78) するために女性社会改良活動家を「非医学的で情緒的」と批判し差異化を志向していたにもかかわらず、彼女らとの同盟を余儀なくされたのだという。

なぜソーシャルワーカーらがモローら性衛生学者の有力な盟友になりえたのか。著者によれば、セツルメント運動等を舞台に活躍したソーシャルワーカーら女性主導の民間組織活動家たちは、19世紀型国家が対処しきれない社会問題に積極的に取り組み、チャリティ運動家との論争を通じて自己の議論を鍛え上げた。結果として彼女らは、都市民の現実に即しているという意味での科学性を主張しつつ、共感という武器を同時に備えた存在として自己の権威を主張するという立場を構築した。やがて彼女らは公衆衛生を梃子にして、科学を自らの側に引き寄せて政治文化変革の主導権をも主張したという。性衛生学はソーシャルワーカーらにとって「自らの知を医学や社会科学の言葉で語り直す場」であり、彼女らは「分厚い蓄積のあった売買春論争の土俵で、誰よりも実践的で社会改良できるのは誰か」を科学的に論じた (109)。そしてその実力を性衛生学者たちも認めざるをえなかったのだと、著者は指摘する。

社会問題としての性病の危険に焦点を当てた売買春廃絶のために1914年に結成されたアメリカ社会衛生協会についても（第4章）、著者は同協会を反売春運動の科学化の勝利としてきた通説を批判し、むしろ同協会が性衛生学者、実践力を誇示するソーシャルワーカー、

「科学という権威を確保して新時代の主導権を取りつつ、秩序批判は封じ込め」ようとする（121）ロックフェラー、そしてテクノクラートたちによる、科学という新しい政治文化の行方をめぐるせめぎ合いの場であったと論じる。

著者は、その中で同協会が「アメリカン・ナラティヴ」（129）に依拠することでその正統性を確保しようとしたことを指摘する。これは、アメリカの売買春廃絶の試みを、乗り越えられるべき過去として位置づけられたヨーロッパの管理売春との対比において世界史的使命であると位置付けることにより、緊張をはらみつつ共存する諸勢力を糾合する手段であったという。

第5章は、アメリカ社会衛生協会を母体にして第一次大戦期に設置された陸軍省管轄下の機関である基地厚生活動委員会に着目し、政治文化の主導権をめぐる諸アクターの連携と競合の複雑な関係の展開を追う。従来の研究は、同委員会によって推進された性病防止政策、いわゆる「アメリカン・プラン」の特徴を、国家の主導下における身体を規律化する制度、道徳的でなく医科学的な反売春政策、医学者・テクノクラートによる主導権の獲得にあるとしてきた。しかし著者によれば、アメリカン・プランに表出していたのは旧政治秩序の動揺に対する不安であり、そこにはアメリカの先進性・正統性を確立しなければならないという課題に直面し、課題を達成する「実効性」を求められていた同委員会参加者たちの差し迫った状況があった。

ゆえに、実効性を真に担えるのは誰かという争いが生じる。この争いにおいて性衛生学は優越性と権威を独占できず、また連邦政府の力が不十分であったため、YMCAなどの民間団体やソーシャルワーカー、女性活動家たちの現場での活動に頼らざるをえなかった。ソーシャルワーカーや女性活動家たちは、自己の実践的な力量こそ科学性を有すると主張し、「科学的ソーシャルワーク」の名のもとに社会改良の拠点として同委員会を捉えてもいたのだという。

第6章は、停戦に伴う同委員会解散以降の展開が政治文化に与えた影響を検討している。同委員会を率いたテクノクラートたちは委員会の事業を成功と見なし、活動を平時にも展開しつつ女性活動家・民間団体への依存を解消することで、新しい知の権威を確立することを目指した。他方、女性活動家やソーシャルワーカーは、戦後を見据えた活動を継続する点でテクノクラートと一致しながら、委員会の現場での活動成果を誇示して自らの社会改良志向に科学的権威を纏わせようとした。両者は愛国的事業としての科学の権威を自らのものにしようと競合した。

著者によれば、テクノクラートは実効性ではなく狭義の科学に活動を絞り、その限定的な専門性の定義に立脚した権威を確立する道を選んだ。その典型例が、社会衛生運動の広がりを傘下におさめようとしながらも保健分野にその活動を限定した公衆衛生局であった。テクノクラートは「狭義の専門性にいわば閉じこもることで、社会衛生学を駆使して社会のすみずみまでをおさえようという願望を手放し」ていき（215）、新しい権威の確立を目指す土台自体を失っていった。しかしソーシャルワーカーたちも、連邦政府の支持や戦時世論の追い風を失い、狭く定義された「科学」から排されたことによって科学的権威を纏うことが困難になり、限定的ケアワークへと撤退していったのだという。

終章は、反売買春運動を通じて争われた20世紀初頭政治文化の一連の変動の後に現われた状況を概観し、以下のように解釈する。科学の意味の限定化によって、科学はその基

盤自体を自ら掘り崩してしまった。科学は「先行する知と区別するための標識」としての地位を獲得すると同時に、既存秩序への批判を放棄して運動としての広がりを失い、むしろ広がりの可能性を排除する機制が定着していったとも言える。

ここに、政治秩序再編の表面的な成功と内実での挫折が見出されるのだと、著者は論じる。科学の意味の狭隘化に不満を抱く者、限定された「科学」の対象外とされる者など、新体制の基盤を盤石さから程遠いものにし続ける要素を多数抱えながら、しばしの間、展開していく。この新しい時代の政治文化の状況を、著者は書名に掲げられた言葉――「虫喰う近代」と表現したのである。

本書は以下の3点において、アメリカ史研究に大きな貢献をなしていると評者は考える。まず、中産階級・エリート層と民衆・下層民という二項対立を設定して両者をそれぞれ一枚岩の存在と仮定し、前者による後者の規律化という構図に権力言説の解釈を回収する叙述への批判である。フーコーの規律権力論に影響を受けた研究には、社会のあらゆる局面に規律権力の働きを見出そうとするものが多いが、その結果、ときに規律権力と規律される存在のあいだの、平板で静態的な関係の叙述に陥ることがある。皮肉にもここには、むしろ規律権力を一枚岩の中産階級と仮定し、規律権力の働きかけの対象を下層民と仮定する叙述を再導入する契機すら存在している。

しかし著者は、規律する権力が一枚岩の固定的な存在ではなく、緊張をはらんだ流動的な歴史的存在であることを強調する。著者の指摘に従えば、誰が何をどう規律化するのかということは固有の歴史的状況の中で争われたのであり、あらかじめ規律する権力と規律される客体の不動の関係を措定することはできない。フーコー風の言説分析にしばしばみられる歴史的アクターなき歴史叙述が、特定の権力の布置の不可避性という印象を与えがちなのに対して、著者のアプローチ法は、歴史に再びアクターによる主体的行為の可能性を取り戻す試みであるとも言える。ただし著者は、超歴史的・非歴史的な主体を仮定してはいない。言説の外あるいは言説を超越した主体を前提とせず、言説によって主体化されながらも言説を主体的に流用して――本書においては無論「科学」という言説である――自己を語り行動するアクターの蠢きを見出し、その歴史性に注目する点に、著者の手法の意義があるのではないか。[1)]

第2に、ジェンダー史研究への貢献である。本書の特徴の一つは、男性改革者と女性改革者をそれぞれ男性的／女性的と区分された政治文化を担う存在とは前提しない、という点にある。アメリカ女性史における革新主義期改革運動の研究には、女性活動家が女性特有の改革の文化を体現し主張していたとする叙述がしばしば見られた。特に母性主義国家論に表れるこうした傾向には、著者が指摘するように「政治文化の布置全体は変わらない」(89) まま、特殊領域としての「女性の」領域・「女性の」文化が仮定され、全体に対する付加的・補足的な分野としてゲットー化される可能性が付きまとう。特に男性改革者を「科学」に、女性改革者を「道徳」に依拠した存在として描くときに、20世紀政治改革史を科学の勝利として論じる通説の傾向と結びつき、このゲットー化は女性史の成果のインパ

---

1) 歴史的主体に関する近年の議論として以下を参照。長谷川貴彦「物語の復権／主体の復権――ポスト言語論的転回の歴史学」『思想』第1036号、2010年、144-60頁。

クトを減殺する。

男性を中心とした性衛生学者や社会科学者が科学を男性化して専門性を独占することを企図し、逆に女性を中心としたソーシャルワーカーは科学に則りながら科学をわがものにしようとする解釈を積極的に提示して、独占の試みに異議を申し立てる。この関係の中に著者が見出すのは、「科学」が排他的に男性性と結びつけられるのか、女性活動家にこそ開かれるべき言説なのかをめぐる、科学言説とジェンダーの関係が流動的であった特有の歴史的状況と、そこでの複雑な闘争である。これは、性差を構築し意味を付与することを通じて権力関係を編成する知としてのジェンダーを問い、その力学を明らかにする歴史学の成果の1つである。

第3に、ナショナリズム史研究としての意義である。著者は第4章から第6章にかけて、性衛生学者とソーシャルワーカーが「科学」の権威をめぐって膠着状態に陥ったとき、両者を調停するものとして、アメリカの先進性と世界史的使命という語りが浮上したことを指摘し、これを「アメリカン・ナラティヴ」と呼ぶ。

従来「国民化」のプロジェクト、すなわち国民意識形成のための運動や制度の研究は盛んになされてきたが、ナショナリズムを受容する側の分析は必ずしも多くはなかった。本書は、「科学」の権威をめぐって対立しながらも連携しなければならなかった諸勢力間を調停するものとして、アメリカン・ナラティヴが称揚される歴史的モメントを明らかにしており、ナショナリズム浸透の歴史的条件についての理解を深めてくれる（ただ、この点に関しては、いわゆるアメリカニズムの歴史に関する研究蓄積との関係においてさらに深められれば、より意義深い指摘となったであろう）。

さて、1910年代の政治文化の変転を論じた本書の分析と叙述の秀逸さには脱帽するほかないが、本書があえて触れなかった点について確認しておくことも無駄ではなかろう。望蜀との批判は免れえないが、以下の論点を交えることで政治文化史の議論はさらに立体的なものになりうるのではないだろうか。それは、「新しい社会史」の遺産をどう継承するか、という問題である。

本書の主役は性衛生学者とソーシャルワーカーであり、本書は両者の相克が新しい政治文化を生む、あるいは生み損ねた過程を描くことで、一枚岩の支配階級による下層民の規律化という旧来の枠組みを見事に覆した。しかしそれゆえに、両者のあいだの連携と競合〈のみ〉が政治文化史的帰結のほぼすべてを決定したかのような印象も受ける。両者が解決すると称して争った対象たる売買春問題の「当事者」である、売春婦あるいはその可能性を疑われた女性たちの営為は、この政治文化をめぐる改革者たちのせめぎあいの帰結に、どのような影響を及ぼしたのであろうか。

70年代以降の「新しい社会史」としての女性史が目指したことのひとつは、それまで不可視あるいは客体としてしか扱われてこなかった存在に主体性を見出すという試みであった。言説の布置を超えた本質主義的な主体の存在を前提する――たとえば、「抵抗する女性」という主体を仮定するなど――可能性に対して、慎重にならねばならないのは確かである。しかし、歴史的制約の中で歴史に働きかけ、エイジェンシーを発揮する存在であったことも確かであり、この点を考慮しない場合、政治文化の主体たるべき存在とそうでない存在をあらかじめ決定し、後者を事前に排除したうえで主体的存在と仮定されたアクターのみ

が歴史を動かしたかのような叙述に陥る恐れも、ありはしないだろうか。

売春婦や労働者階級女性・移民女性たちの世界を検討した女性史・ジェンダー史研究の成果が描き出す世界を、本書が明らかにした反売買春改革の政治文化史の世界と総合した場合、どのようなアメリカ政治文化史像を描くことが可能になるだろうか。現時点でその構図を提示する能力は評者にはない。しかし、売春の社会史や女性史研究の知見に照らし、性衛生学とソーシャルワークの角逐の文脈として以下のような要素を考察することは無意味ではないだろう。

ひとつは「売春」の定義そのものの揺らぎである。19世紀ヴィクトリア文化的な女性観が貞淑な女性／不道徳な女性というダイコトミーであったのに対し、20世紀初頭の都市における労働者階級の若い女性たちはその中間に「チャリティ」や「トリーティング」といった実践を生み出した。反売春活動家たちは都市の商業娯楽空間などにおけるこうした多様な実践をいかに認識・定義・叙述すべきかにおいて、混乱をきたした。[2] 反売買春運動が新しい権威を確立し得なかった一因として、一見自明のものと思われた社会問題としての「売春」の定義を攪乱する下層民女性たちの実践があった、という可能性はないのだろうか。

第2に、反売買春運動の一定の「成功」という状況に対する売春婦側の対応に、第一次大戦後の新政治文化確立が失敗する一因があったのではないかという可能性である。大戦期アメリカン・プランに至る反売買春運動は、全米各都市部において売春施設および赤灯地区の廃絶という成果を見た。だがそのことは、特定施設・地区に囲い込まれていた売買春行為が都市公共空間全体、とりわけ黒人ゲットー地区へと移動分散するという結果を生んだ。[3] あらゆる都市公共空間は、サバイバルを試みる女性たちが売春ないしこれに準ずる行為をなしうる場となり、誰が売春婦なのかを同定しがたくなった。つまり、性衛生学もソーシャルワークも手をつけがたい状況が生み出されたことに、戦後の新権威確立の試みが挫折した一因があったのではないかという可能性である。

新しい政治文化を築き権威を奪取しようとする中産階級・専門職の営為を一枚岩の規律権力者という仮定から救い出しその複雑な歴史性を明らかにした著者の多大なる功績に、権威のもとに行われる規律の標的とされた人々の営為へのまなざしを組み合わせることで、アメリカ政治文化が歴史的過程の中で誰によっていかにつくられたのか、あるいはつくられなかったのか、という問いをさらに深めることを、今後の政治文化史・ジェンダー史の研究者は課題とすべきではないだろうか。

---

[2] たとえば以下を参照。Kathy Peiss, "'Charity Girls' and City Pleasure: Historical Notes on Working-Class Sexuality, 1880-1920," Ann Snitow et al. (eds.), *Powers of Desire: the Politics of Sexuality* (New York: Monthly Review Press, 1983), 74-87; Elizabeth Alice Clement, *Love for Sale: Courting, Treating, and Prostitution in New York City, 1900-1945* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006).

[3] 以下を参照。Kevin J. Mumford, *Interzones: Black/White Sex Districts in Chicago and New York City in the Early Twentieth Century* (New York: Columbia University Press, 1997).